大館市史編さん調査資料　第６集

秋田県北秋田郡比内町

谷地中「舘」
中野円墳状遺構
発掘調査報告書

１９７３・３

大館市史編さん委員会

秋田県
北秋田郡
比内町

谷地中「舘」
中野円墳状遺構

1973・3

秋田考古学協会員　奥山　潤
秋北バスＫＫ社員　高橋昭悦
大館市史専門委員　田中修造
秋田考古学協会員　小山純夫
秋田考古学協会員　板橋範芳

例　言

1　この報告書は2部にわかれ，第1部は比内町谷地中字舘の一部発掘調査の成果で，第2部は仝町中野の円墳状遺構群の1基の発掘報告である。

2　調査の担当者は奥山　潤（秋田考古学協会員）である。

3　両報文とも遺構，遺物については，担当者の指示により板橋範芳（秋田考古学協会員）が原文草稿を作成，全篇の構成，編集にあたって担当者が補筆した。

4　遺構写真は市史専門委員山田福男と奥山により遺物写真は写真家越前貞一氏による。

目　　次

例　　言
第Ⅰ部　比内町谷地中「舘」
Ⅰ　緒　　文 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と地形 …… 1
Ⅲ　第1次発掘調査の概要 …… 3
Ⅲ　第2次発掘調査 …… 5
1　遺　　跡 …… 5
A　竪穴遺構 …… 5
B　竪穴遺構について …… 8
C　舘期遺構 …… 9
2　出土遺物 …… 10
Ⅴ　総　　括 …… 15
第2部　中野円墳状遺構
Ⅰ　遺構の存在と現状 …… 26
Ⅱ　発掘調査の経過 …… 26
Ⅲ　発掘調査 …… 28
補　　記 …… 31

図・図版目次

図

Fig 1 遺跡位置図 …… 2
Fig 2 舘平面測量図 …… 4
Fig 3 舘発掘全体図 …… 折込
Fig 4 舘Ⅰ号竪穴b不明遺構実測図 …… 6
Fig 5 舘出土土器拓影実測図 …… 11
Fig 6 舘出土鉄器実測図 …… 13
Fig 7 舘出土砥石実測図 …… 13
Fig 8 中野予備調査記録 …… 27
Fig 9 中野円墳状遺構実測図 …… 折込
Fig 10 中野出土石器実測図 …… 31
Fig 11 中野出土寛永通宝拓影図 …… 32

図 版

口 絵

PL 1 珠数掛出土玉類 …… 19
PL 2 舘遠景 東より …… 19
PL 3 舘発掘全体写真 北より …… 20
PL 4〔1〕 舘第Ⅱ号竪穴 北より …… 21
PL 4〔2〕 舘北東地区 北より …… 21
PL 5 B不明遺構 …… 22
PL 6 舘出土土器 …… 23
PL 7 舘出土土器 …… 24
PL 8 舘出土陶器 …… 25
PL 9 舘出土鉄器 …… 22
PL 10 中野円墳状遺構 …… 33
PL 11〔1〕 東ブロック方形掘り込み 東より …… 34
PL 11〔2〕 東ブロック方形掘り込み 南より …… 34
PL 12〔1〕 北ブロック 北西より …… 35
PL 12〔2〕 西ブロック 西より …… 35
PL 13 中野出土寛永通宝 …… 36

第　1　部

比内町谷地中「舘」

Ⅰ 緒　　文

ここに報告する比内町谷地中の舘と呼ばれている遺跡の発掘は，遺跡のすぐ南にある大巻の出身である大館鳳鳴高校社会部員高橋文義君の熱心な手配により，全高社会部考古学班によって開始された。桂高校社会部員も一部援助し，奥山　潤の担当のもとに，小山純夫，成田忠志（いずれも秋田考古学協会員）が参加した。昭和46年６月であった。

この発掘はわずか一日限りであったが，この小台地の地表の黒土は農用に剝土され，ほとんど下層の表面に近く，浅かったため，たちまち意外な遺構が出現した。その発掘結果は小規模ながら注目すべきもので舘の発掘としては北秋では最初のことでもあり，特に角柱の掘立柱は，本県としてははじめての出現であった。「秋田考古学」第30号にのせたその概要をⅢに掲げた。

今次発掘は，市史編さん資料として，いうところの「舘」の性格をつかむ手掛りを得る目的も兼ねて，上記試掘個所の南域，台地の南端部からはじめたものである。

発掘は台地の南端部であるため，結論めいた考察を加えるまでに至らないが，方法論的に舘の発掘のもたらすものは，決してその形状，内部施設に止まるものではなく，わずかな出土品の意味するところを汲んで，そこに居を構えた１集団の性格の分析を試みなければならない。特にその文化内容が暗示する経済性こそ，舘発掘の目的でなければならない。〔O〕

Ⅱ 遺跡の位置と地形

〔Fig 1，2　PL 2〕

谷地中の高台すなわち「舘」には冠称がない。地籍は比内町谷地中字舘20，21番地である。

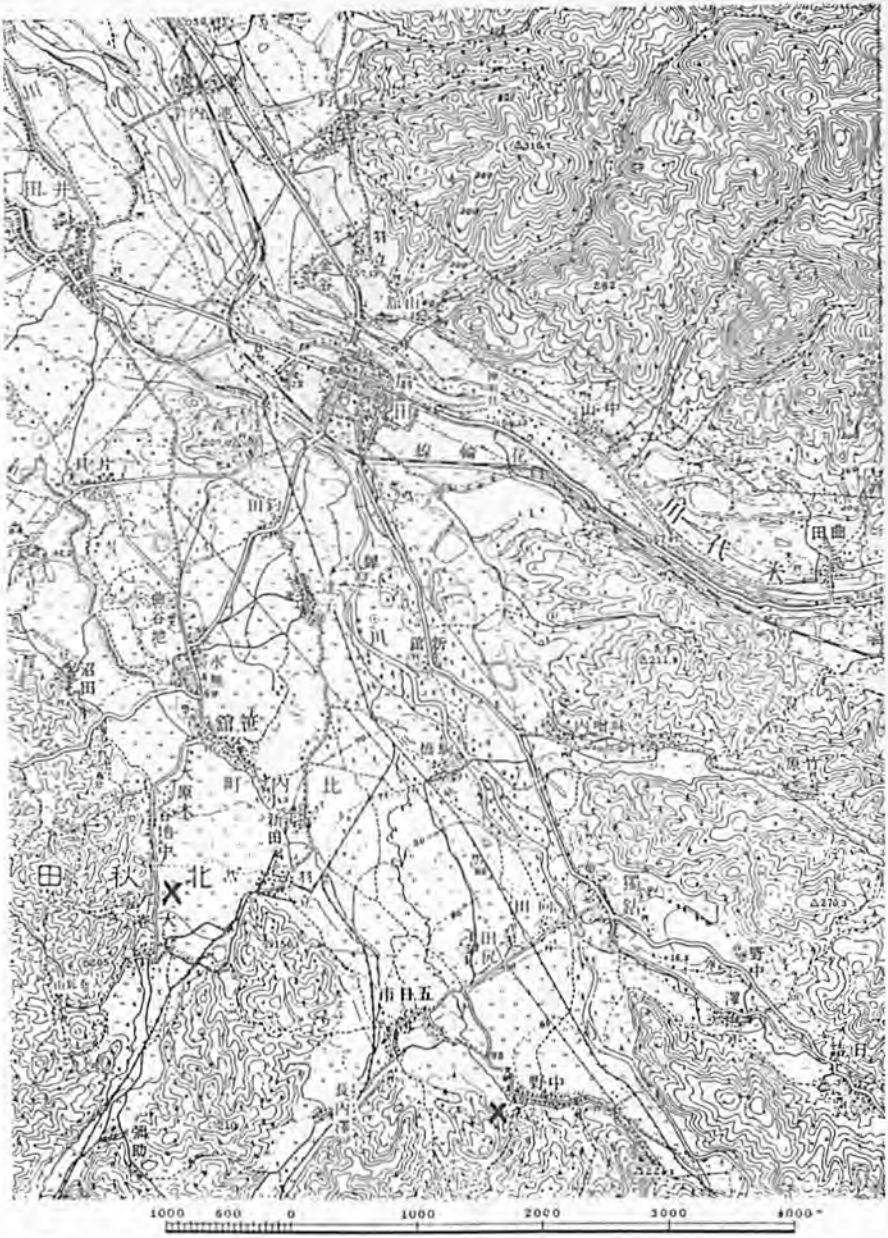
比内町扇田から県道桂瀬一比内線を南に５km，谷地中の集落と，大巻の集落のほぼ中間，県道の東側水田中にある低い台地が遺跡である。西側には山地がせまり，その据を引欠川が北流する。遺跡と川は約 200 mほど距てる。

大巻の南の山地の糸柄沢に発する引欠川が大巻まで下ると，そこから平地が北に向って開け，川流の方向に傾斜する。遺跡の上面と大巻の集落はほゞ同水準である。高台，即ち舘は，南の山地に向ってＶ字型にすぼまる谷間の入口に当る位置におかれている。

大巻からほゞ高台までが，開折された谷の斜面開口部分で，高台付近がやゝ平坦な地形，以南は谷地中の地名が示すように低湿であったらしい。

高台の西側には，おそらく高台の遺物と同期の埋没林があり，北東側，つまり引欠川よりの水田は稲の色調からも，この高台の周囲を削った引欠川旧蛇行跡の沼地があったらしく，高台がタテ即ち砦としての性格をも持ち得ることを暗示している。

高台は水田よりの比高４mほど，十和田火砕流で形成され，もと附近は扇田方面まで続く一面の



本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１の地形図を複製したものである。承認番号　昭48　第366号

Fig 1　遺跡位置図

火砕流と，その二次堆積物による台地であったものが，引欠川により蝕剝されてわずかに残ったものである。

現在東縁は農道のため直線状にけずられ，またおそらく他の周縁ももとの形ではなかろうと推測される。

この台地の地質的特色として，シラス層の上面が砂質粘土におゝわれ，特にこの粘土層の上半部は脱色して優白色を呈し，すこぶる微粒である。

この粘土は製陶に最適であり，この遺跡の出土土器もこの粘土で製作されていると考えられるが，乾燥すると頗る堅硬であって，これが竪穴や柱穴跡の保存に大きな役割を果している。なお台地南東端部にはこの粘土層の被覆がうすいかまたは欠けた区域もあった。〔O〕

台地下四周は耕地整理され，旧い地貌は知るべくもない。

地理的に見ると，大巻部落は，阿仁方面から山越で通ずる山道（現在は県道桂瀬比内線）が，大館盆地（狭義には比内）に入る出口部分にあたり，遺跡はその要部にある。阿仁地方との連絡路は大巻部落より南へ約 5km，立又より小湯津内沢あるいは獅子ケ沢——大湯津内沢を経て，明利又へ出る。明利又より松沢——葛黒——大畑——妹尾館を経て鷹巣方面へ，又，明利又より松沢——上舟木——桂瀬へと出て，阿仁川沿に北上すれば米内沢，南下すれば阿仁方面へ通ずる一方，大巻より南約 3 km，一ノ渡から高陣沢——奥見内沢——葛黒へ通ずる山道もある。この山道は，比内と阿仁地方を結ぶ，短絡路としてその役割をはたし，谷地中「舘」の位置と機能も，この連絡路とは，切り離して考えることはできない。

Ⅲ　第１次発掘調査の概要

発掘調査は，幅２ｍないし 1.5ｍのトレンチ３本で行ったが，剝土前のボーリング探査により，文化層面が，地表10～15cmと浅いことを知った。もと30cm程度の黒土に覆われていたらしい。剝土の結果，灰白色粘土の文化面には細かくブルドーザーの軌道痕が刻まれていたが，この面で容易に多くの柱穴と，竪穴落込みを検出した。小量の遺物もまたこの面から採集された。

トレンチ発掘であるから，掘立柱列から建物プランを計測することはできない。柱穴の寸法は不同であるが，30×35cmが最大で，深さは平均25cmほどである。

竪穴は完掘していないからその規模は不明なものが多いが，６戸検出され，１～３号竪穴は小形で，２号にはカマドが一部残存している。４～６号竪穴は完掘してみないと時代も性格もわからないが，大部分は土師器の時代と推定される。隅丸方形竪穴の一辺らしい部分も検出された。小竪穴は，のちの竪穴を作るため埋められ堅くかためられていた。

出土遺物はわずかである。竪穴内出土はなくすべて竪穴や掘立柱の掘られた面上から出土している。

○　土師器　石英砂粒を胎土にまぜた，焼成の良好な甕の口縁部破片，糸切底でない底部破片ほか

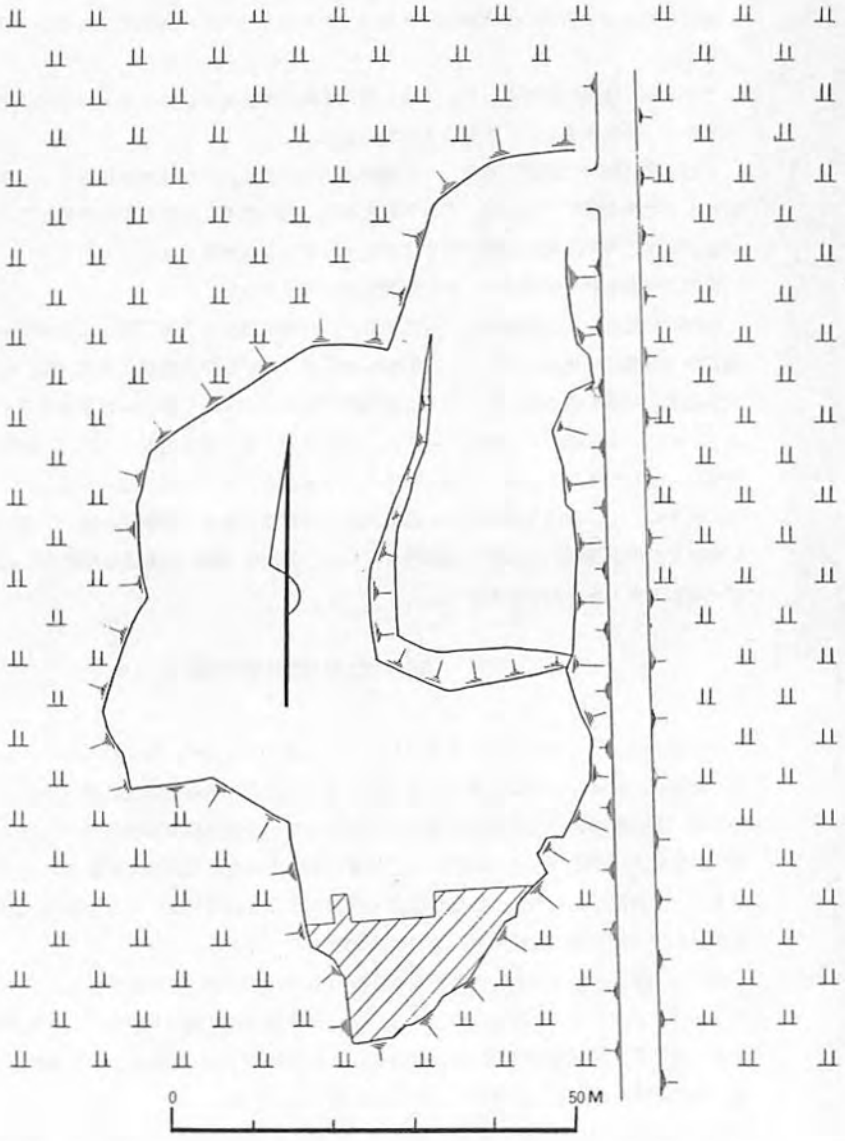


Fig 2　舘平面測量図

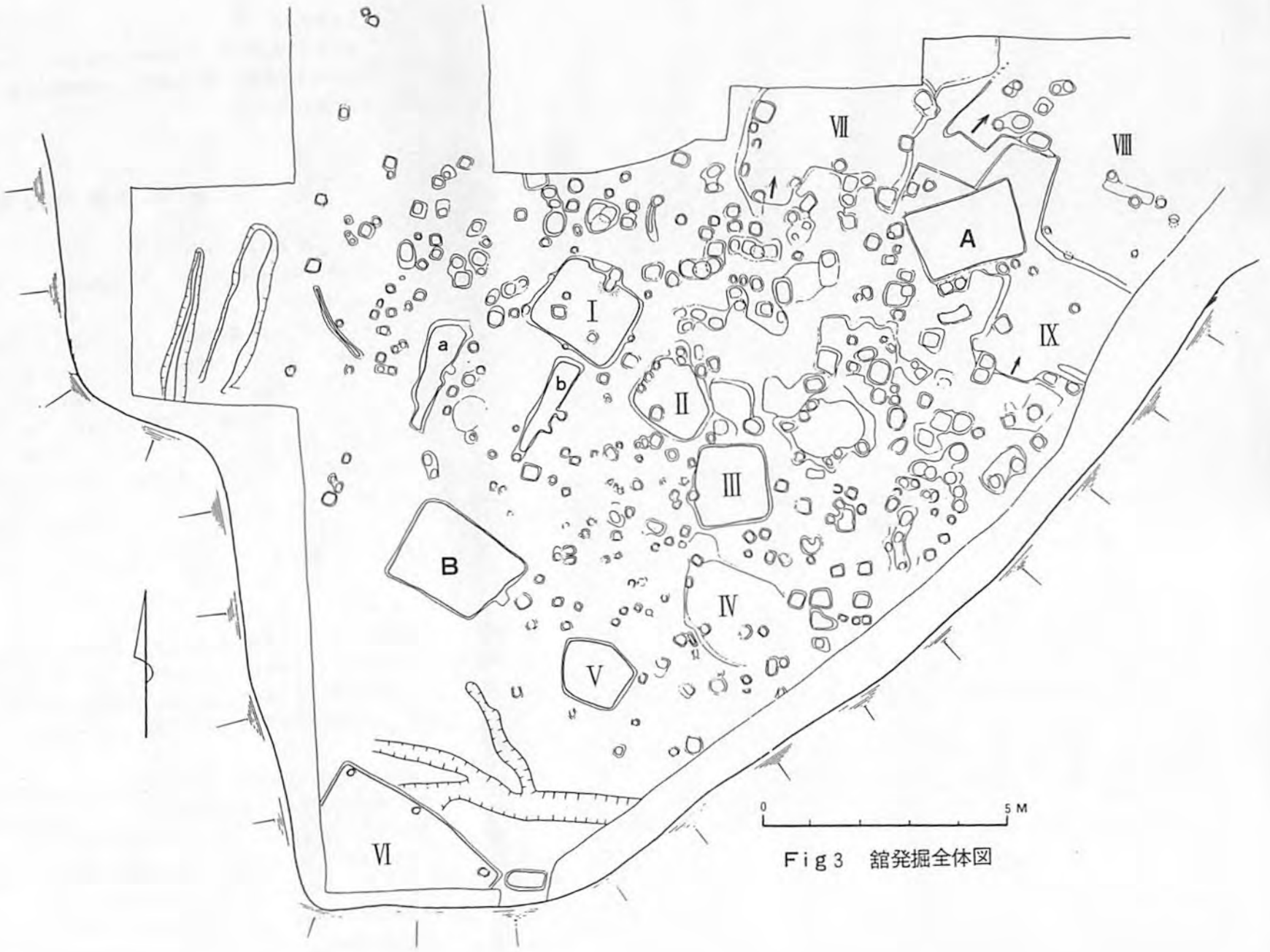


Fig3　舘発掘全体図

2，3片である。

○ 銭　貨　元豊通宝1枚。他文字不明の錆の著るしいもの1個。

表採遺物には政和通宝1枚，焼成のよい須恵器破片数個，多量の土師器破片，陶片（白磁，染付，青磁？）破片がある。〔O〕

Ⅲ　第2次発掘調査

1　遺　跡（Fig 2－3 PL 3）

南北巾約110m，東西の最大巾約60mの独立残丘上にあり，南端部約270㎡の調査を行った（Fig 2 斜線部分）。

台地上は現在畑他で，最北端部は，台地東側を通っている農道から台地に上るために，土砂が除去され緩傾斜になっている。台地中央東側には，1.5m ほど低い約 800平方メートルの平坦面がある。これはもとこのような姿であったものか，周囲の田地へ客土したためのものか，今回は確認作業が出来なかった。台地斜面にはこの地方の舘跡によくみられる段築構造はなかったようである。

調査により土師器を伴う竪穴9戸（Ⅰ～Ⅸ）……うち須恵器伴出3戸（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）……。長方形掘り込み遺構2，不明遺構2，溝状遺構2，掘立柱穴を多数検出した。以下これら遺構について記述する。

A 竪　穴　遺　構

第1号竪穴〔Fig 4〕

長軸の長さ約2m，短軸の長さ約 1.8m，壁高約 0.3mの隅丸方形竪穴である。竪穴中央より北東寄りに，粘土を基盤とし，灰と焼土がその上を覆った火気使用の跡が「い」字型にあり，その中央に舘期の柱穴が切り込み，これに重複して同期の柱穴が，北東壁を突き破っている。このためこの「い」字型の火気使用跡を，炉とするか，カマドの袖部とするかは，他の例の検出を待つことにしたい。

柱穴は11個検出されたが，a・b・d～hの竪穴外に柱をもつ住居跡であろうと思われる。ただ西隅の柱穴をcにするか，dにするかは問題があろうが，ここでは他の三隅がすべて住居跡外にあることから，dが使用されたのではないかと思われる。

これにより柱のプランを見ると，四隅の柱は竪穴外にあり，その間にくる柱は竪穴壁にとりつける（北東壁は不明）ということになるのであろう。

北東壁北側に不整形なテーブル状遺構があり，その面上よりPL 10・21，22の不明遺物および土師器口縁部が出土した。出土遺物は土師器，須恵器が出土した〔Fig 5－5，6，14，19〕

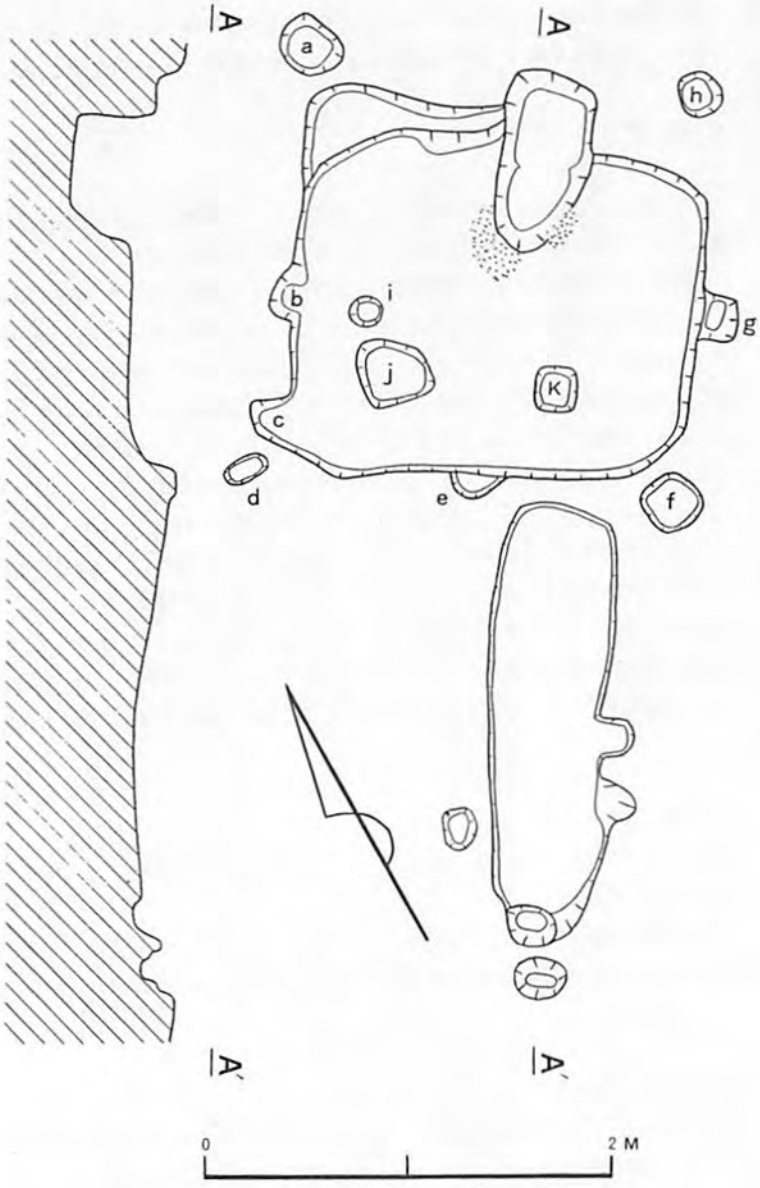


Fig 4　舘Ⅰ号竪穴ｂ不明遺構実測図

第Ⅱ号竪穴〔PL 4〔1〕〕

長軸の長さ約 1.5m，短軸の長さ約 1.3m，壁高約 0.2mで，北東壁がふくらんで歪んだ五角形を示す。床面は平坦でよくしまっており，柱穴は7個検出されたが，プランは不明である。北西壁にある3個の柱穴は円柱をたてた跡で，他は角柱である。火気の使用跡はみられない。須恵器破片が出土した〔Fig 5－17〕

第Ⅲ号竪穴

長軸の長さ約 1.5m，短軸の長さ約 1.3mの隅丸方形竪穴で，壁高は約 0.2m，床面も硬くしまり平坦である。第Ⅰ号住居跡同様，形の整った小型隅丸方形竪穴であるが，柱穴については判明しなかった。遺物は床面より土師器，須恵器が出土した〔Fig 5－3，18〕

第Ⅳ号竪穴

北壁は直線的であるが，西壁から南壁にかけてはゆるやかなカーブを画き，東側は壁面がまったくみられないためプランの確認ができなかった。四隅をもつ方形くずれのプランか，第Ⅱ・Ⅴ同様五角形を呈すものかは不明である。現形で南北約2m，東西約2mを測る。

第Ⅴ号竪穴

長軸の長さ約 1.5m，短軸の長さ約 1.2mで，第Ⅱ号竪穴より明確な五角形プランを示す。壁高約 0.1m，床面は硬くしまり平坦である。竪穴内外に関係あると思われる柱穴は検出できなかった。

第Ⅵ号竪穴

台地最南端に位置し，その南半分は舘期における，台地斜面調整により切削されている。北東壁の長さは約4mあり，隅丸方形竪穴であろうと思われ，その平面プランは，4m×4mの方形になるものと推定される。

壁高は約40cmで，壁面もしっかりしている。側溝はみられない。柱穴は壁ぞい竪穴床面に三本検出され，径約20cm，深約40cmで，四隅に各1本，四隅間に各1本の計8本の柱を想定することができる。床面より口縁の花文陶器が出土した。

第Ⅶ号竪穴

南東半分を確認しただけであるが，南西隅に住居への出入口と思われる緩斜面〔Fig 3，矢印の方向へ下降〕がある。北東隅確認のため拡張し，わずかではあるが検出することができた。それによると，出入口と思われる緩斜面を除いて，平面プランは，東西軸の長さ約 3.5m，南北軸の長さ約3mとなり，壁高は約 0.3mほどあり，壁面の保存も良好であるが，北東隅では他の竪穴と重複しているらしい。出入口と思われる緩斜面は東西軸約1m，南北軸約1mである。床面よりFig 5・

13の土師器が出土した。

第Ⅶ号竪穴

南西隅に出入口と思われる緩斜面がある〔Fig 3 矢印の方向へ下降〕。南側側壁は第Ⅸ号竪穴と重複しているため，壁面はみられないが，側溝が見られ，範囲が判定された。それによると，出入口と思われる緩斜面より東にのびた側壁は，1 mほどで側溝にかわる。その側溝は南に折れ，第Ⅶ号竪穴とは異なり，出入口と思われる緩斜面より南へその床面を広げる。

床面を詳細に調査した結果，竪穴中央に東面に走る溝を埋めた跡が検出された。この延長は出入口と思われる緩斜面より東にのびた壁と線上で結ばれる。このことにより，元来は第Ⅶ号竪穴同様，東へのびていた側壁を，何んらかの事情により削除して，南に拡張したものであろうと推定される。床面よりFig 5－9，16の土師器が出土した。

第Ⅸ号竪穴

第Ⅶ，Ⅷ号竪穴同様，南西隅に出入口と思われる緩斜施設がある。これより北へのびる西側壁は，約1 mほどで，A長方形掘り込み遺構により切断され，その延長は，第Ⅷ号住居跡により削平され，痕跡をとどめていなかった。東側は第Ⅷ，Ⅸ号竪穴とも排土の関係で確認出来なかった。床面よりFig 5－1，4，15の土師器が出土した。

B 竪穴遺構について

竪穴は以上9戸（第Ⅰ～第Ⅸ）検出したが，その形状より3類（A～Cとする）に分かれる。

A 類

Ⅰ～Ⅴは小形の隅丸竪穴で，5戸のうち小形隅丸方形竪穴（第Ⅰ・第Ⅲ）と，その亜系と考えてよいと思われる五角形に近い竪穴（Ⅱ・Ⅴ），及び壁の確認が不可能で，はっきりとした形状が判明しなかったもの（第Ⅳ）の一群である。

B 類

第Ⅵの大型の隅丸方形竪穴をこれにあてることができる。すなわち，A類とは明らかに規模の点で異なり，柱穴も竪穴内に規則正しく検出されるなど，ゆきとどいた遺構を残すものである。

C 類

第Ⅶ～第Ⅸがこれに類別される。その規模は，B類に類似するが，出入口と思われる緩斜面を有する点，他の類型とは区別されるべきであろう。

A類は第一次調査でも検出されており，今回調査した範囲内では，台地中央部に集まり，B類は南端にあり，築館時に台地斜面調整により切られている。C類は比較的掘り込みの深い竪穴で，東側に集まっている。

全体の調査を終えたものではないので，竪穴群を分布関係で云々するのは早急かも知れないが，一応ここで三類に分類し，他の検出例を待って，相互関係を追求していきたい。

C 舘 期 遺 構

舘期建物の柱穴と思われるピットは，多数検出され，直線的な柱列は想定出来たが，それと結び組み立てる立体的な建造物を復原し得るような柱列を推定できなかった。

柱穴はすべて掘立柱式で，今回調査した西半部には小規模な径10cm～20cm，深10cmほどの柱穴がみられ，東半部には，大規模な径30cm～40cm，深20cm～30cm（中には70cmのものもある）ほどの柱穴がみられた。これは独立残丘上面という限られた面積の中で，建造物を考えるとき，またこの舘跡のもつ性格を考えるとき，重要な問題を含んでいると思われる。柱穴の痕跡よりその大部分が角柱であり，小規模な柱穴はそのまま角柱を埋めこんだもののようである。

南端部と，西側にある溝の外側には柱穴がみられず，内外をこの溝で画しており，掘立柱に伴なう遺構であろうと思われる。西側溝の東に一線に並ぶ柱列が検出されたが，これに立体的建造物を想定できる繋がりある柱列はみあたらなく，内柵，あるいは塀のような遺構ではないかと思われる。

第Ⅵ号竪穴の東側を拡張したところ，80cm×40cmの掘り方が検出された。これ！個では，その性格を判断することはできないが，台地縁に設置された柵列跡の一つではないかと思われる。南端部西側溝に囲まれた内の柱穴群の，どの柱穴よりも大きく，掘り方によっていることなどから，かなり大きな建物を立てたであろうことが想像される。今後台地縁の調査によりその性格は判明するであろう。

長方形掘り込み遺構A

長軸の長さ約2m，短軸の長さ約1.5m，深0.9mの長方形掘り込みで，壁は四辺とも直上し，壁面，床面は平坦で，しっかりしている。

この遺構の東隅が第Ⅸ号竪穴の壁部を切っており，竪穴より後世の遺構であることが判明した。掘り込み内には，黒色土と，地山の混合土が充満しており，埋積土中より土師器口縁2片〔Fig5，2，7〕が出土した。

長方形掘り込み遺構B

長軸の長さ約2.2m，短軸の長さ約1.7m，深0.5mの長方形掘り込み遺構で，A遺構同様，壁は直立し，壁面，床面とも平坦でしっかりしている。埋積土中上部より，鋤先と思われる鉄製品が出土した。〔Fig6 PL4－2〕

不明遺構 a

長軸の長さ約 2.3m，短軸の長さ約0.7～0.3mの不整形の遺構である。床面は中央部が低く，両部分が高い舟底形である。中からの出土遺物はない。

不明遺構 b〔PL5〕

長軸の長さ約 2.1m，短軸の長さ 0.3mの不整形の遺構で，a同様底面は中央部がくぼむ舟底形である。柱穴は5個検出されたが，その関係は不明である。

a，bとも，同じ性格をもつ遺構であることは疑いを入れないが，a，b一対で一つの遺構となるものか，それぞれが独立した役割をもつ単独遺構であるのかは，今後の発見例を待ちたい。

2　出土遺物（出土土器一覧表）

出土遺物には，土師器，須恵器，陶器，鉄器がある。

土　師　器〔Fig5－1～16，PL9－1～14，PL20－18,19〕

量的に最とも多い遺物であるが，完全あるいは，全容を知り得る資料はまったくない。

a）口　縁　部（1～7）

1～3は，口縁部が直上し，反りの少ないもので，深い椀あるいは深鉢のような形状を示す。4は体部から内弯し，口唇部は厚みがなく，鋭い断面を示す。5～7は甕の口縁と思われ，5は口頸部でするどく外反し，体部の最大径が口径よりかなり大きい土器と推定される。6は口縁上部でわずかに外反（口唇部が直上するといってもよいかもしれない）し，比較的丸みのある器形になると思われる。7は6同様口縁上部で，わずかに外反するが，その口唇部は4同様鋭どい断面形を示す。

b）注口土器（8）

注口部だけの出土であったが比較的大形のもので，外面をヘラ状工具でていねいに磨いてある。孔部の作製は，心棒になる工具に粘土をまき，心棒を取り除いて孔部を整形する作り方である。この注口部は，体部に貼りつけたもので，その貼りつけ面から剥離したものである。

c）把手付土器（9）

口径12cm～13cmほどの浅鉢状の器体に把手をとりつけたものである。把手部分は長さ 3.5cm，直径3cm。中空部分は直径 1.7cmで断面は円形を呈する。中空部分の製作は，細いヘラ状の工具でえぐり出してつくっている。胎土は粗砂粒が混入しかなり荒く，二次火熱を受けている。この種の出土例は青森県西津軽郡鰺ケ沢，大館森山より報告されている。*

* 斎藤　忠・岩崎卓也　第28節　大館森山遺跡「岩木山」岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書　pp486～501 Fig195 昭43・9・10

Fig 5　舘出土土器拓影実測図

d）体　　部（10～13）

10，11は底部に近い部分であろうと思われる。10は厚さ４ｍｍ～５ｍｍで，内外面ともヘラ削りのあと刷毛状工具によりなでつけられている。11は比較的大きな粗砂粒を混入し胎土は荒い。厚さは７ｍｍ～８ｍｍある。12は巻き上げの痕が顕著で，外面をヘラ整形しているが，巻き上げ痕を残している。13は内面が黒色で櫛状工具による条痕がみられる。その痕跡からみると櫛歯は５本のようである。

e）底　　部（14～16）

14は底部からの外傾のゆるやかなもので，壺の底部と思われる。内面には底部周縁に櫛状工具による整形が見られる。底面には小石がびっしりと付着しており，製作過程において付着したものか，意識的につけたものかは判明しないが，15にも同様みられ，また付近の遺跡からもこの手の底部の発見例が，最近増加している。*製作法上の一特色あろう。なお胎土には混入されず，底部外面にだけ付着させるのが特徴である。

須　恵　器（17～19）

数片出土しているが，いづれも大形甕の破片と思われる。17はロクロ成形で，器面はその上をヘラで削って整形している。18の外面には縄文がローラーによって施文されている。19は外面に18同様縄文がローラーによって施文され，内面には巾の広い櫛状工具によると思われる条痕がある。

名称不明遺物（20）

浅鉢であろう。口唇部は平坦で，口縁部に一条の沈線をめぐらす。

鉄　　器〔Fig６，PL12〕

１は，現長13.5cm，厚７ｍｍ～10ｍｍ，重さ38ｇである。図上部が利部と思われるが，どのような利器なのか不明である。

２は鉄鏃の茎と思われる。現長８cm，重さ８ｇである。

３は鋤の刃部と思われるが，木部をはさみこむ刃部ではなく，刃部を木部ではさみこむようになっており，現にとりつけ部に横位に木部が付着残存している。

砥　　石〔Fig７〕

長さ約26cm，幅約10cm，厚さ約９cmで，岩質はドレライトらしい。使用面は二面あるが，うち一面は剝離してわずかにそれを残す。他一面には使用痕の凹みが２ケ所ある。

＊　たとえば比内町真館および市内池内平安期竪穴出土土器にこの種の好例をみる。

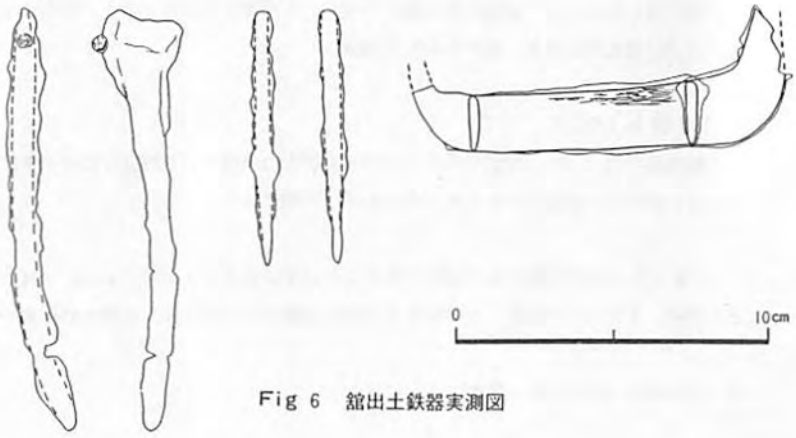


Fig 6　舘出土鉄器実測図

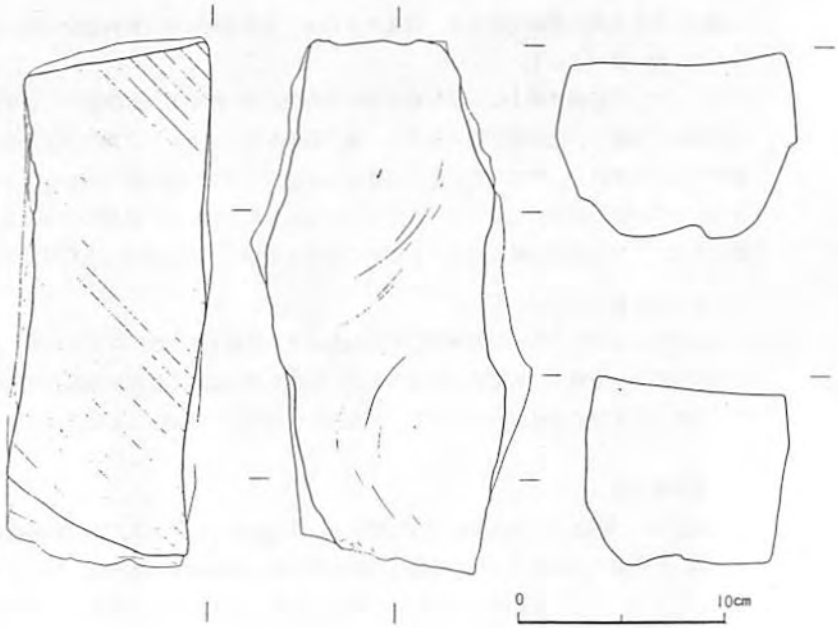


Fig 7　舘出土砥石実測図

陶　　器〔PL11—①,②,③〕

本跡出土陶・磁器については，東京国立博物館東洋美術室長　長谷部楽爾氏，県文化財専委小野正人氏の御教示を賜わった。

①は高台付皿で，1号住居跡北東壁に切り込まれた角柱掘立柱々穴底部より出土した。外体面に唐草，内底面に何物かの絵の染付がある。長谷部氏は15世紀後半～16世紀初頭のもので，内面の染付は獅子の絵ではないかとの見方であった。

また小野氏によると元あるいは明の染付ではないかとの見方であった。内面の絵は長谷部氏のいわれる獅子あるいは竜ではなかろうか。(口絵)

②はⅥ号住居跡床面より出土し，高台付皿と思われ，内底面に複弁の花文があり，六弁と思われる。長谷部氏によると室町時代末期～桃山時代にかけての美濃焼との見方で，小野氏は黄瀬戸ではないかとの見方であった。黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部は美濃地方で焼かれたもので，長谷部氏のいわれる美濃焼とはこのことを示しているものと思われる。(口絵)

③は②と同様Ⅵ号住居跡床面より出土した。長谷部氏によると室町時代末で比較的裏日本に多いものであるとのことであった。

第二次発掘調査日誌

4月29日　比内町教委の手配によるマイクロバスで現場へ，南端部からの排土作業をはじめる。Ⅵ号竪穴南側溝，Ⅴ号竪穴，B長方形掘り込み遺構，Ⅳ号竪穴，Ⅲ号竪穴，Ⅱ号竪穴及掘立柱穴検出

4月30日　前日検出した遺構の調査及び，a，b 不明遺構，西側溝，Ⅰ号竪穴，Ⅶ号竪穴，A長方形掘り込み遺構，Ⅷ・Ⅸ号竪穴検出，調査。石垣市史編さん委員長，山田市史編さん委員来訪。

5月3日　調査区域を，南端から北へ18mの地点までと決定，遺構の調査とならんで測量開始。

5月7日　現場掃除，写真撮影，午後より埋め戻し。

第二次発掘調査関係者

発掘責任者　石川芳男
発掘担当者　奥山　潤
発掘調査員　高橋昭悦，田中修造，小山純夫，板橋範芳
発掘補助員　斉藤隆悦，高橋善一，中村邦夫

〔大館鳳鳴高校〕　千葉哲吉，釜谷高志，高橋文義，虻川明通，佐藤清悦，畑田淳一，奈良雅哉，奈良長幸，猪瀬文彦，和田悟，羽沢健一郎，畠山光政，鈴木亨，佐藤雅之，佐藤順悦，黒沢功，杉渕紀昭，堀内仁志，石川均，山田洋二，佐藤輝順，田村義明，椿田利之，千葉健一郎，菅原一江，小笠原多津，佐藤富士子，戸田絹子，佐藤真紀子，川井康代

〔大館桂高校〕　原田幹子，藤垣恵美子，安達和子，西根律子，立石康子，伊藤照子，工藤早苗，荒川恵美子，庄司こずえ，渡辺好子，千葉智子

考　　察

1　竪穴群と掘立柱群について

Fig 3 発掘全図が示すように，これら竪穴群は，その形状から数型式にわかれ，それがまた竪穴形成期の編年につながるもののように考えられる。

このように，実に多数の掘立柱が検出されしかもそれが，高床式の掘立柱建物の柱跡であるか，竪穴に付属したものであるのか，判断に苦しむのである。しかしこれは，観点を変えれば，桁行幾間，梁間いくらという建築物の存在を考え，この分を除いて考慮すると，残りは，竪穴をとりかこむものであり，更にその中の明らかに，ある竪穴の柱であると考えて無理のないものをも除外すれば，残りは，現代の方形または矩形の建物の柱としては，到底考えられない配置を示している。

このことは，縦来の考えを，一部の竪穴（むしろ半地下式の住居，または窖と表現すべきであろう）の外屋が，必らずしも方形，ないし矩形でなく，極めて自由な多角形であった場合を想定する必要があるようにさえ考えられる。

他の館址での発掘結果によっても，このことは考案され，谷地中「舘」のこのような半地下式の施設が，これとあまり時差のない連続を示すものであるばかりか，たとえ谷地中「舘」の竪穴，半地下式住居ないし窖が，或いはここに存在したかもしれない掘立柱式高床の建物との間に，大きい時間的不連続をさしはさむものではないように思えるのである。

つまり，半地下式の住居ないし窖を使用した時期から，地上高床建物の時期への移行期ないしは，それが分離する直前の併用期に当っているように思われる。

この様な場合，古い方の時期の外屋プランについては，その文化系統において，かなり異質のものが介在していることを感じるのは論外であろうか。

われわれは建築史に全くの素人であり，以上の推定は性急唐突にすぎる推定に止まるとしても，あえて，発掘過程の印象として記録しておきたい。また掘立柱の高床建物があったとしても，それは，半地下式建物の存在する間に移入された建築法で，半地下式竪穴外屋プランの伝統をかなり強

くひいたもののように考えられる。

また5角型を示す竪穴については，もし強いてその類型を求めるならば，それは北海道の，オホーツク式土器を共伴する擦文式土器を出土する竪穴に類似を求め得るかもしれない。谷地中「舘」の出土土器の編年位置からも，あまり無理でないと思われるが，同時に擦文土器を出土する竪穴の5角形は，明らかにオホーツク式土器を出土する6角形竪穴の影響をうけたものと考えられることから，* もしも前述の推定が著るしい妄想でないならば，この北海道例について留意する必要があるものとひそかに考えている。

また青森県中津軽郡岩木町常盤野遺跡の第12号住居址**は，平石をならべたかまどのある壁側をのぞく三方を，高さ30cm，幅1.8mほどの土盛で囲んだわずかに長方形の竪穴であるが，短辺と長辺の各中央が外方に鈍角に張り出す，注目すべき形状を呈している。その柱穴は，すべてかまどと反対側の壁の内側にそい，配列が特殊であり，また出土の土師器は小量の須恵器を伴出し，常盤野式と命名されている。この常盤野式で山間に発見されるものは刻文土器を伴なう。

このことが竪穴の平面プランにある種の関係があるように感じられる。谷地中「舘」の五角形，長方型竪穴も「真舘」のそれも何らかの文化的関連を，この津軽岩木山麓の竪穴との間にもっているとは言えそうである。

2　谷地中「舘」について

谷地中の「舘」が，その終末期が中世末期に及ぶものであったとしても（或いは未発掘地区にその遺構が存在するかもしれない），その起源は，まだ土師器（おそらく須恵器の新らしいものと共伴していた）時代にはじまる。比内地方の古代史中世前半史には，全く文献がない。当然その文化内容についてはすべて不明である。

われわれがこの点にはじめて自らの手で触れたのは，昭和45年11月，比内町独鈷舘（中世の比内地方を支配した浅利氏の拠舘であったと伝えられる）の大日堂南東200mで縄文遺跡を発掘の際で富沢正雄君ら大館鳳鳴高校社会部考古班員によって内黒土師器出土の方型竪穴の一部が発見された。われわれは独鈷舘の史的背景のほんの一端に触れ得たことになろうか。

やがて谷地中高台の第1次発掘の際，数戸の小型竪穴と，掘立柱の一部を発掘し，若干の驚きを感じた。

更に今次発掘のあとに，奥山が調査した比内町真舘***の一部発掘で，谷地中「舘」で出現した五角形竪穴に近かい竪穴や，入口に傾斜した特設の施設をもち，周辺の柱穴がきわめて任意的な配列をしている半地下式住居ともいうべき遺構をはじめて知った。しかし真舘には谷地中「舘」のように小さい浅い竪穴は発見されなかった。この間に，わずかながら舘の編年の可能性が浮んできたことになる，その立地と，その出土遺物，その構造が結びつかない限り，舘の性格と，その居住者の性格ともに不明のまゝであろう。

舘とは北鹿地方に関する限り，すべて英雄たちの抗争の拠点ではなさそうである。またその英雄たちが，住民から収奪して，自己の経営を図るほどのヒンターランドを持っていたとは，地理的条件からも考えられない。おのずからその性格が浮んでくるようである。

しかし谷地中「舘」の性格については，これまでのところ発掘区域がせまく結論を立てるに至っていない。ここでは，この舘の存在位置に強い興味をひかれることもつけ加えておきたい。〔O〕

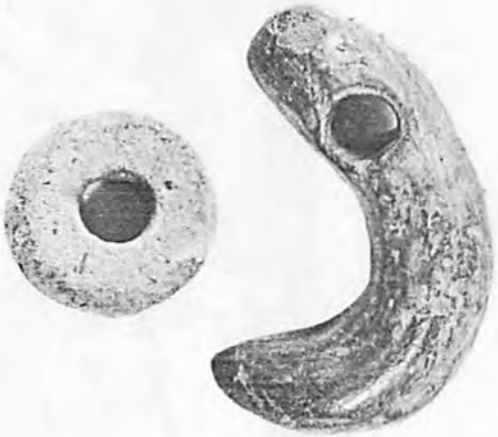
＊　大場利夫　「大樹遺跡」

＊＊　渡辺兼庸・常盤野遺跡　「岩木山　pp143～155　第5節　1968，9

＊＊＊奥山　潤・富樫泰時　「真舘緊急発掘調査報告書」　昭・48・2

出土土器一覧表

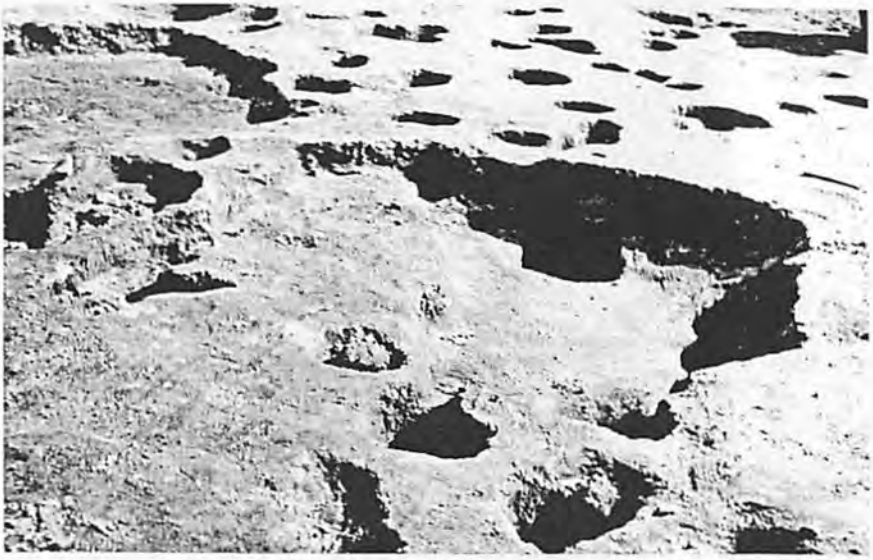
器形	種別	Fig.No.	PL.No.	出土地点	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 口縁	手法 体部	手法 底部	備考
壺	土師	5－1	9－1	Ⅸ 竪	黄褐	黄褐	粗砂粒混入	良	巻上げ			内面刷毛目痕・外面ヘラ整形
壺	土師	5－2	9－2	A 長掘	白	白	粗砂粒混入	不良				内面刷毛目痕・外面ヘラ整形
壺	土師	5－3	9－3	Ⅲ 竪	褐	黄褐	粗砂粒混入	良	巻上げ			
壺	土師	5－4	9－4	Ⅸ 竪	褐	黒	良好	良	巻上げ			内面刷毛目痕・外面ヘラ整形
甕	土師	5－5	9－5	Ⅰ 竪	灰褐	灰褐	粗砂粒混入	良				内面刷毛目痕・外面ヘラ整形
甕	土師	5－6	9－6	Ⅰ 竪	灰褐	黒褐	粗砂粒混入	良	巻上げ			外面ヘラ整形
甕	土師	5－7	9－7	A 長掘	黒褐	黒褐	粗砂粒混入	良				内面櫛目痕
注口	土師	5－8	9－8	西 溝		褐	粗砂粒混入	良		手づくね		外面ヘラ整形
把手	土師	5－9	9－9	Ⅷ 竪	灰褐	淡褐	粗砂粒混入	良	手づくね	手づくね		把手部とりつけ
甕	土師	5－10	9－10	Ⅴ 竪	暗褐	暗褐	粗砂粒混入	良		巻上げ		内面刷毛目痕・外面ヘラ整形
甕	土師	5－11	9－11	Ⅴ 竪	灰白	灰白	粗砂粒混入	不良		巻上げ		外面ヘラ整形
甕	土師	5－12	9－12	Ⅴ 竪	黒褐	暗褐	粗砂粒混入	良		巻上げ		内面刷毛目痕・外面ヘラ整形
	土師	5－13	9－13	Ⅶ 竪	黒	褐	粗砂粒混入	良		巻上げ		内面横位に櫛目痕
壺底	土師	5－14	9－14	Ⅰ 竪	黒	褐	粗砂粒混入	良				内面櫛目痕
甕底	土師	5－15	10－18	Ⅸ 竪	黒	黒	粗砂粒混入	良			とりつけ	内面指圧によるナデ・外面体部ヘラ整形
甕底	土師	5－16	10－19	Ⅷ 竪	黒	黒	粗砂粒混入	不良		手づくね	手づくね	内面ヘラ整形・体・底部外面ヘラ整形
	須恵	5－17	9－15	Ⅱ 竪	黒灰	青灰	微砂粒混入	良				
	須恵	5－18	9－16	Ⅲ 竪	黒灰	青灰	微砂粒混入	良		ロクロ		外面ヘラ整形
	須恵	5－19	9－17	Ⅰ 竪	暗褐	暗褐	微砂粒混入	良				
浅鉢	不明	5－20	10－22	東								
皿	陶		11－1	Ⅰ 竪								
皿	陶		11－2	Ⅵ 竪								
皿	陶		11－3	Ⅵ 竪								



PL 1　珠数掛出土玉類

PL 2　舘 遠 景　東より

PL 3　舘発掘全体写真　北より

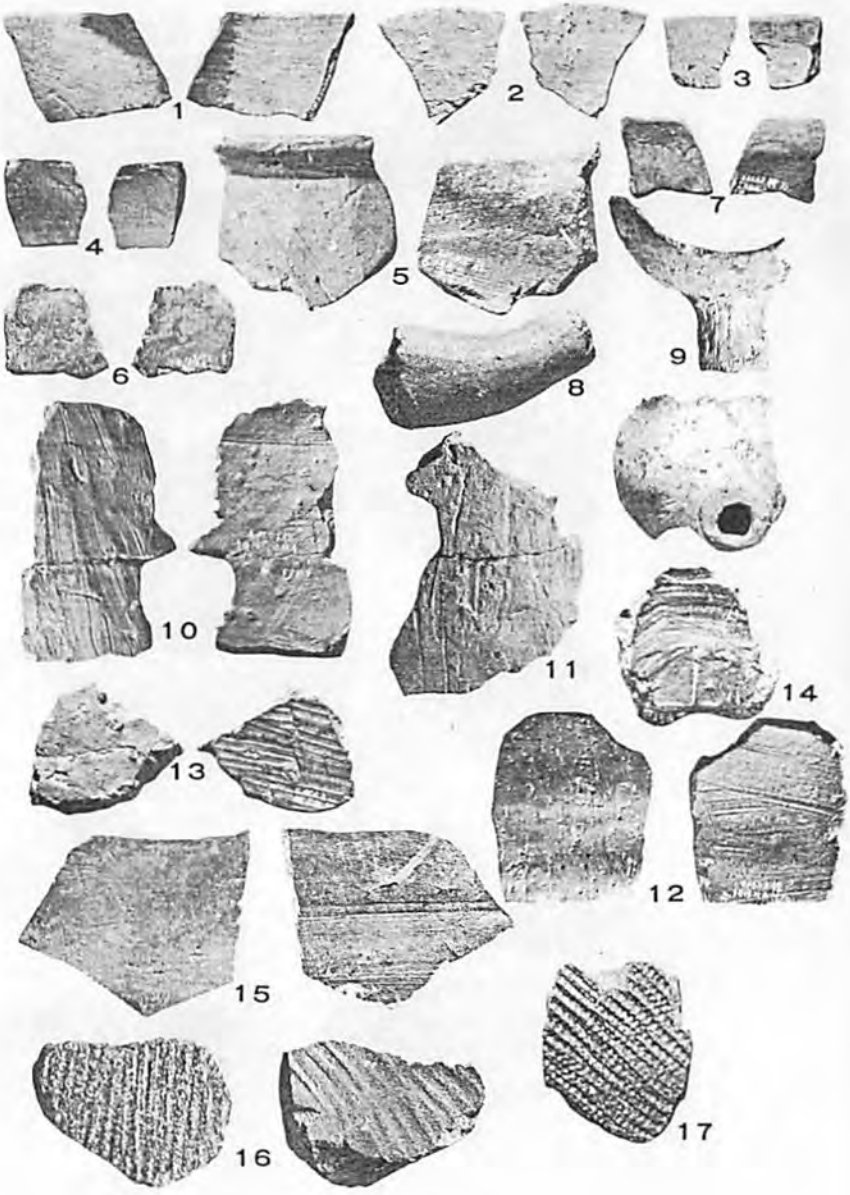


PL 4 〔1〕舘第Ⅱ号竪穴　北より

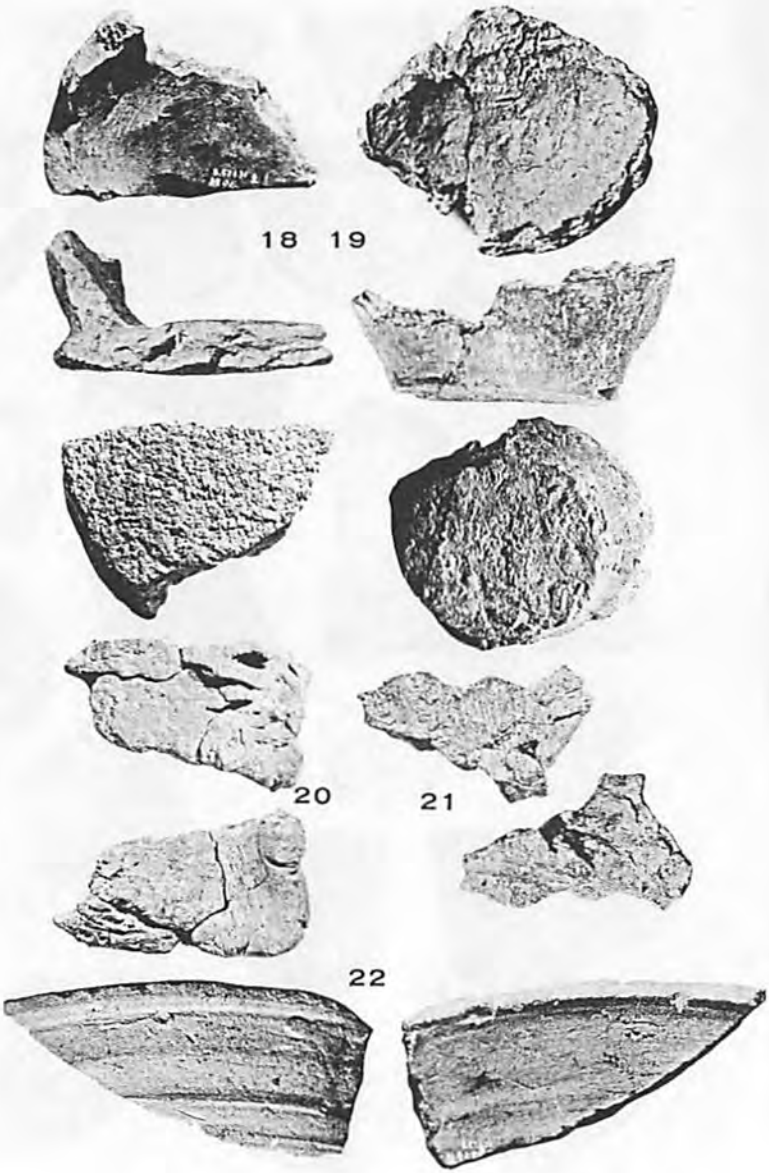
PL 4 〔2〕舘北東地区　北より

PL 5　B不明遺構

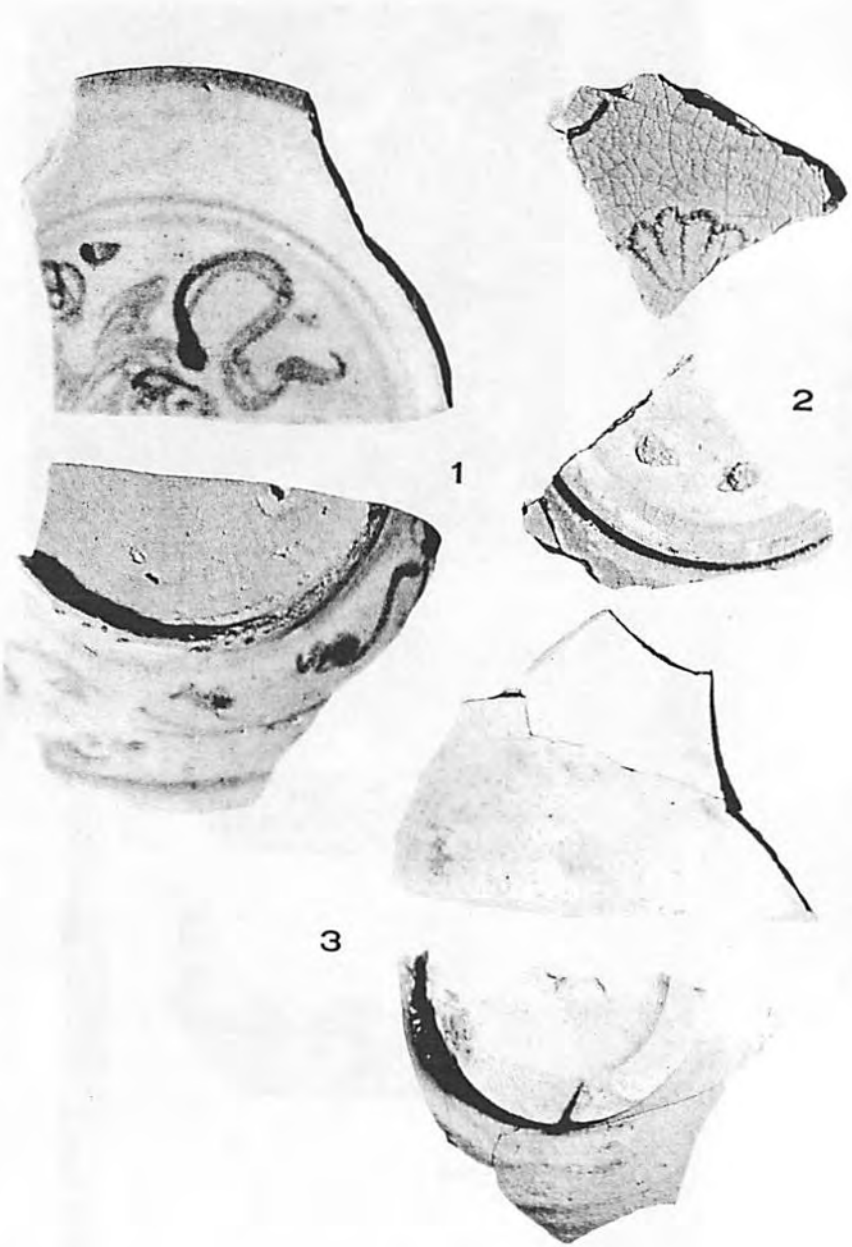
PL 9　舘出土鉄器



PL 6　館出土土器



PL 7　舘出土土器



PL 8　館出土陶器

第　2　部

中野円墳状遺構

中野円墳状遺構

Ⅰ　遺構の存在・現状

中野円墳状遺構群は，北秋田郡比内町中野字上野69－1にあり，山地の縁端部に位置する。中野集落の南側に当り，比高約10m，附近一帯に土師器破片が散布し，谷をへだてた地区は古館といわれている。

この遺構は「秋田県遺跡地名表」通番 307 （古墳の部，番号16）に担当すると思われ，また「秋田県史」第1巻・古代中世編にはこの中野の記事を掲げ，遺構不明とし，土師器を出土した古墳としているが，不明の遺構が土師器を出土するとはおかしな話である。

一方「秋田県史」考古篇には何の記載もない。現在ここには1基の円墳状のマウンドがあり，他の1基は五輪塔をのせている。

前大館市史資料調査員高橋昭悦氏は，昭和41年にこの遺跡を探査し，Fig 8 のような記録を残している。

比内地方の古墳らしい遺物の情報は，大館市史編さん委員岡本時也氏が，大正6，7年頃の幼少時代，町内の珠数掛（独鈷の北，味噌内の南）の段丘縁端部から管玉，穿孔未完成の勾玉を拾得したことから，父君とともにその地点を発掘し，勾玉と小玉各一個を発見され，現存することだけに限る。

この地点附近は土師器も出土し，竪穴もあることは地主の証言するところであり，管玉や勾玉にしても，日用装飾品として用いられたものが竪穴内などにあったものかもしれず，必らずしも古墳内出土とは断定しかねる。PL 1はその現存する遺物の拡大写真である。

このことは比内町内に古墳の存在すること暗示しているようであるが，これまた中野遺構が古墳であると判断する直接的な資料とはなり得ないようである。

付近には谷一つ隔てて明治時代に入ってからの修験者の墓といわれる盛土墓が十数基ある。〔O〕

Ⅱ　発掘調査の経過

これまで「古墳」として伝えられてきたが，はたしてそれが確実なものかどうか確認するため，今回の調査を施行した。県北地方においては，鹿角の枯草坂，三光塚他一墳丘が古墳として確認されているだけである。

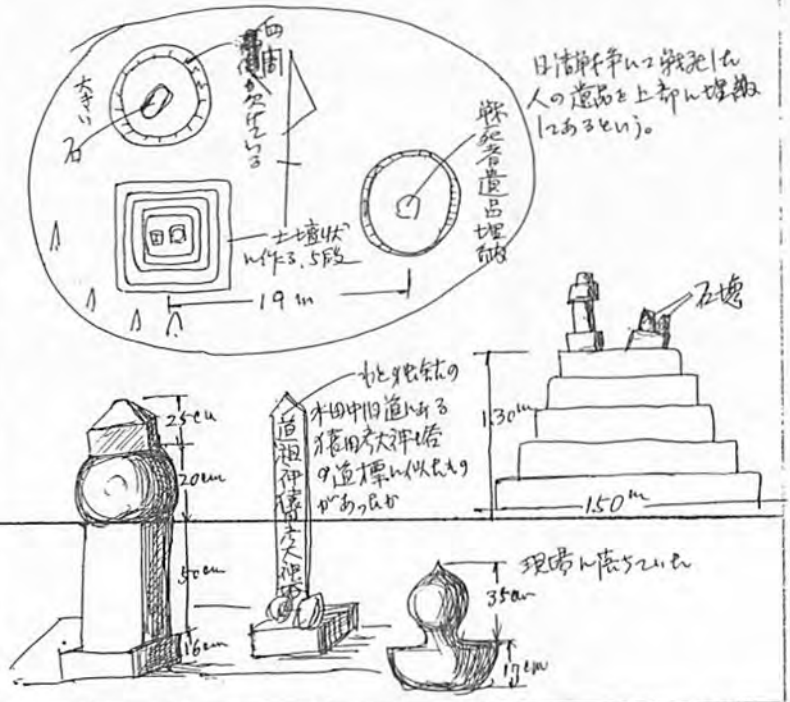
調査は昭和47年8月9日から8月20日まで，大館鳳鳴高校，大館桂高校両社会部考古学班員中の熟練者を選んで，その協力を得て開始した。発掘調査にあたり中野林野農業協同組合長の辻貞治氏より，ひとかたならぬ御援助をいただき，又中野部落の人々の暖かい御支援を受けたことを明記し

調査日誌

大塩郡教育委員会

地点	北秋田郡比内町中野	調査	41年 1月 日	天候	晴・雪少し
種別	担当者	調査員	高橋昭悦		

調査要項



出土遺物

備考

戦死者遺品の埋納の円墳の築立は境上直藏氏。
猿田彦の神塔の築立は辻 貞治氏。
これら盛土群の性格は不明である。内部に石廓がなければ古墳の盛土は現在まで存続するとは思えない。

Fig 8　中野予備調査記録

て謝意を表する。

発 掘 日 誌

8月9日　テント設営，辻貞治氏宅より発掘器材運搬，墳丘の除草。

8月10日　墳丘測量

8月11日　墳丘測量，墳丘を4ブロック（東西南北）に設置，表土剝ぎ

8月12日　表土剝ぎ，墳丘周囲の排土　奥山の案内で弘前大学教育学部助教授村越　潔氏来訪される。

8月14日　北ブロックより調査，包土内より土師器破片出土。

8月15日　北ブロック地山に直径 120cm深さ25cmの円形土坑（Pit 3）径90cm×70cm，深30cmの円形土坑（Pit 4）検出，Pit 3 とPit 4 の間の地山上に，刃部磨製石製品出土，西側ブロック調査

8月16日　西ブロック地山より径90cm×80cm，深さ30cmの円形土坑検出（Pit 1）埋積土中遺物なし，東ブロック調査，床面が西方へ傾斜する長方形土坑検出

8月17日　南ブロック調査，径 130cm×90cm，深 100cmの円形土坑（円柱土坑）検出，埋積土中遺物なし，墳丘上に置かれていた石を排除，石下に土坑の痕跡なし，遺物の出土もなし

8月18日　墳丘セクション実測，土手の排土，南・西ブロック間土手，黒色土層中より寛永通宝10枚出土

8月19日　円形土坑の平面図を墳丘図に写る。埋め戻し開始。

8月20日　午前中埋め戻し，午後器材撤収，調査を終了す。

発 掘 関 係 者

発掘担当者・調査員　奥 山　　潤

調査員　板 橋 範 芳

補助員　千葉健一郎，釜谷高志，畠山光政（以上鳳鳴高校）藤垣恵美子，安達和子　工藤早苗（以上桂高校）

Ⅲ 発 掘 調 査

A 墳　　丘〔Fig 9，PL 6，7，8〕

現形，東西約 4.2 m，南北約 4 m，高さ約 1 m，墳頂部に大きな石2個を載せている円墳で，南半分の裾部は周囲の畑地からの拡張により削土されている。墳頂部に置かれた石が，いつごろから

このような状態であったのか，部落の老人も知らないし，そのいわれも知らない。この石を取り除いて判明したが，石下に約5cmほどの腐蝕土層（表土）があり，この墳丘が出来てしばらくしてから，石を載せたようである。

この墳丘に日清戦争で戦死した人の遺品を埋納したとの事であるが，それらしきものはまったく検出されなかった。北東部にみられた撹乱層が，その跡であろうか。墳丘断面をみると，盛土は10cm～20cmの厚さで積重ねられている。Fig 9 中土層番号は次の通りである。

1　漸移層
2　混合土（黒色土多量）
3　混合土（黄色土多量）
4　黒色土
5　黄色土ブロック包含層
6　黄色土・黄色土ブロック
7　混合土（黒色土，赤色土）
8　撹乱層
9　表　土

地山は墳丘中心直下より，周囲へわずかではあるが傾斜しており，丘陵上で一番高い部分に築かれている。北，西ブロック間にしか漸移層がみられない点などからしてこれは意識的に地山を削土して墳丘中心部を高くしたものらしい。

包土中より，縄文土器1片，土師器破片6片，石器2個を出土したが，付近には土師器の散布が多くみられ，墳丘造営の際，土と共に運ばれたものと思われる。

墳丘ほぼ中央部の黒色土中（Fig 9，×印）より寛永通宝10枚が付着しあって出土した。この黒色土層は，あきらかに墳丘造営時の盛土層であり，出土地点に撹乱，掘り込み等の遺構は，まったくみうけられない。このことから，この墳丘の造営は，寛永通宝が造鋳された以後と，考えてさしつかえないであろう。

B 主 体 部

墳丘中には土壙らしきものは，まったくみられなかった。墳丘下地山には，次の4個の円形土壙がみられた。

	大きさ (cm)	深さ (cm)
Pit 1	90 × 80	30
Pit 2	130 × 90	100
Pit 3	120 × 120	25
Pit 4	90 × 70	30

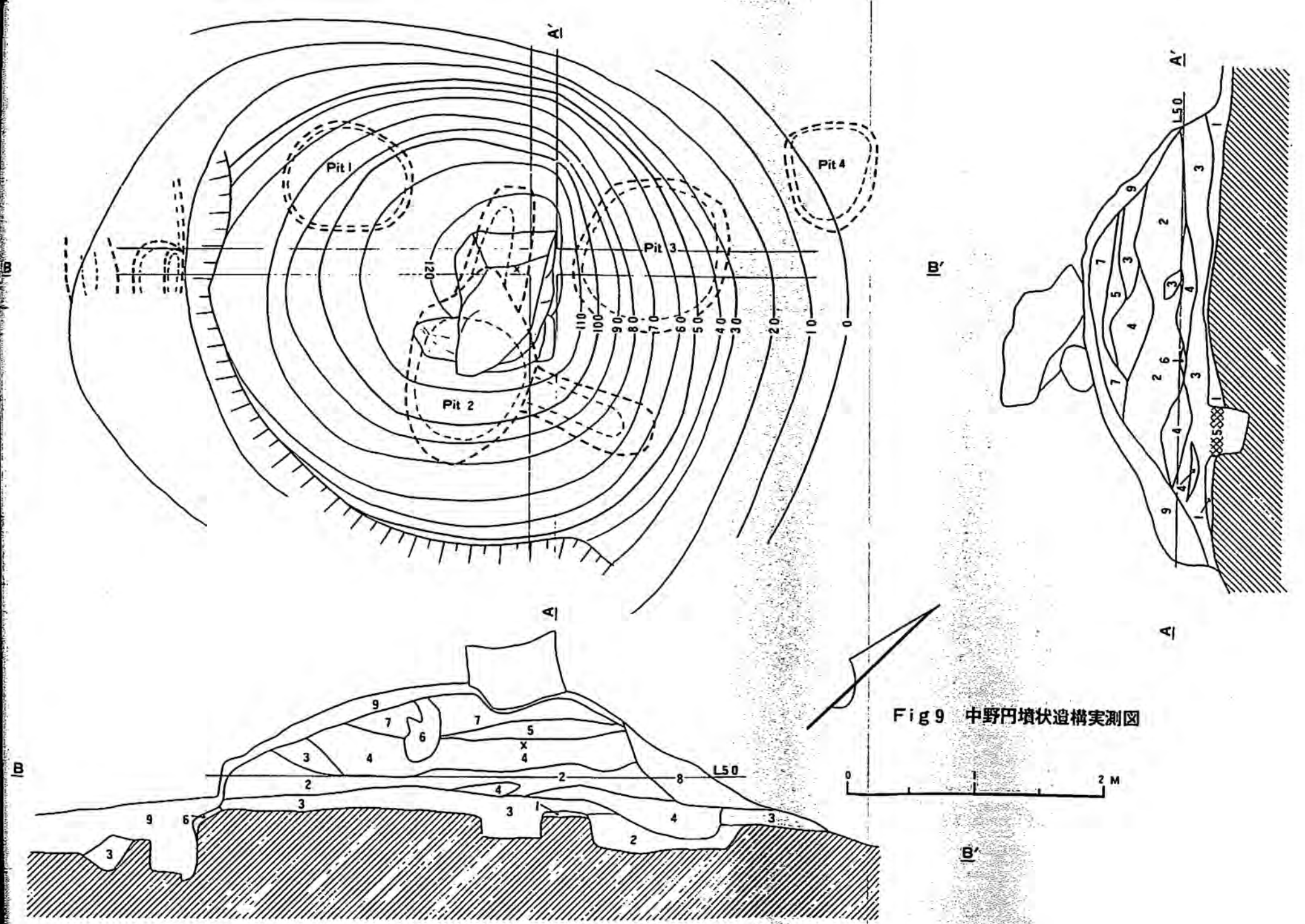


Fig 9　中野円墳状遺構実測図

これらすべてが主体部となる集団墓のようなものであろうか。Pit 2は他の3個ときわめて異り，その形状より，あたかも早桶を入れるに丁度よい穴に思われる。Pit 内の埋積土は，Pit 2が黒色土，他は混合土であり，内部からの出土遺物はなかった。

C 遺　　物

縄文土器　小破片で，右斜縄文で内面に横位に擦痕がある。

土師器　土師器はすべて墳丘包土より出土した破片で手づくねで，内面には刷毛目痕がある。

石　　器〔Fig10〕　2は打製石器で，一部欠損していて全体の形は不明だが，石槍に近い形をなすものと思われる。1は磨製石器で刃部を磨いているが，敲打器であろう。

銭　　貨〔Fig11，PL 13〕

寛永通宝が包土中の黒色土層より10枚出土した。

	直径（cm）	厚さ（mm）	背面字
1	2.5	1	文
2	2.4	0.8	
3	2.3	0.8	
4	2.43	1	
5	2.3	0.8	
6	2.2	0.8	
7	2.3	0.8	
8	2.3	1	
9	2.25	0.8	
10	2.2	0.8	元

Ⅲ　中野円墳状遺構の性格について

以上がこれまで古墳とされてきた同遺跡マウンドの一基についての調査結果であるが，古墳期の古墳であるとする確たる知見は，得ることができなかった。寛永通宝が，墳丘造営時の包土より出土したことにより，その造営時の範囲がせばめられ，江戸時代前期以降と思われるに至った。

この寛永通宝の性格を考えるに，墳丘の下半分を造営し，その時点で寛永通宝を埋納し，後墳丘上半分を造営するという過程が考えられ，造営中途で銭を埋納（追葬）したと思われる。「三途の川の渡賃」は死体に副葬するという点で性格が異なるが，土坑の中から「三途の川の渡賃」と思われる銭の出土はなかった。殊に銭貨が6枚でなく10枚である点は奇異である。

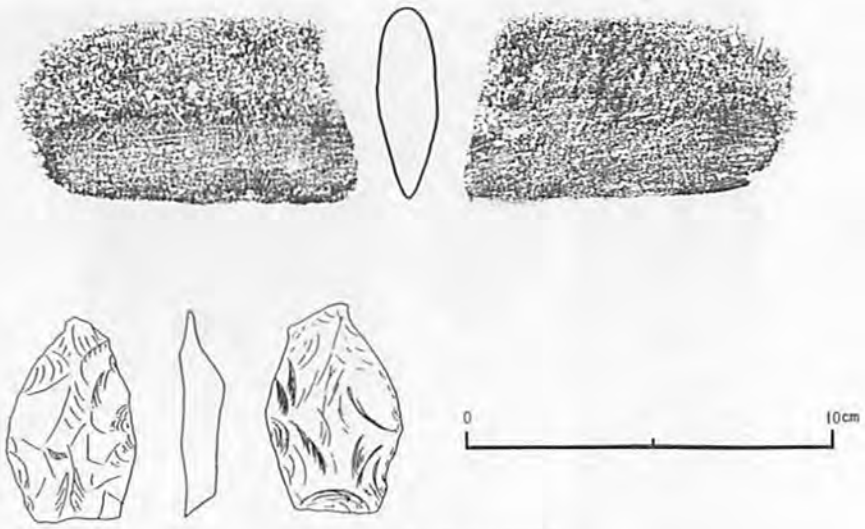


Fig 10　中野出土石器実測図

このような円墳状の遺構はもう一基あり，それが古墳かも知れないと不確実な推測をするのみである。

補　　記

報文執筆者は，出土遺物で年代を示す寛永通宝が包土中位部から出土したことから，下位部を構築し，銭貨を埋め，更に上部を造築したものと考えているが，層位的に言うならば，中位面に銭貨があれば，下位部の床面にあるピットは，銭貨が示す寛永通宝の年代以前とすることもできる。

しかしこのうち，混合土を充填した3ピットは，墓坑にしては，何らの副葬品も発見されなかった点が奇異である。江戸時代，当地方の墓の1例には，煙管，櫛等の副葬があり*何らかの痕跡を残すのが普通であろう。たゞしもし江戸期以前として，中世に入る墓であるとすれば，当地方としては全く知見がない。従ってこれを否定することもできない。

だがここに，修験道の場合を考えてみる必要があるかもしれない。おそらく土俗と強く結ばれた北奥の修験道については，これまた何ひとつ発言できる考古学的な証例はない。

この古墳状盛土の性格を明らかにするには，なお周辺の全面発掘を行ってみる必要がある。**〔O〕

＊　数年前国道第7号線の改修に当り，札幌医大第2解剖学教室　三橋公平教授が　鷹巣町坊沢で発掘された数例がある。煙管，櫛などのわずかな副葬品を伴っていた。

＊＊　この発掘のあと，秋田県教育委員会によりFig 8の五輪塔（江戸末期のもの）の立てられてある方形土壇の傍らに「中野古墳」と記した大標識が建てられた。

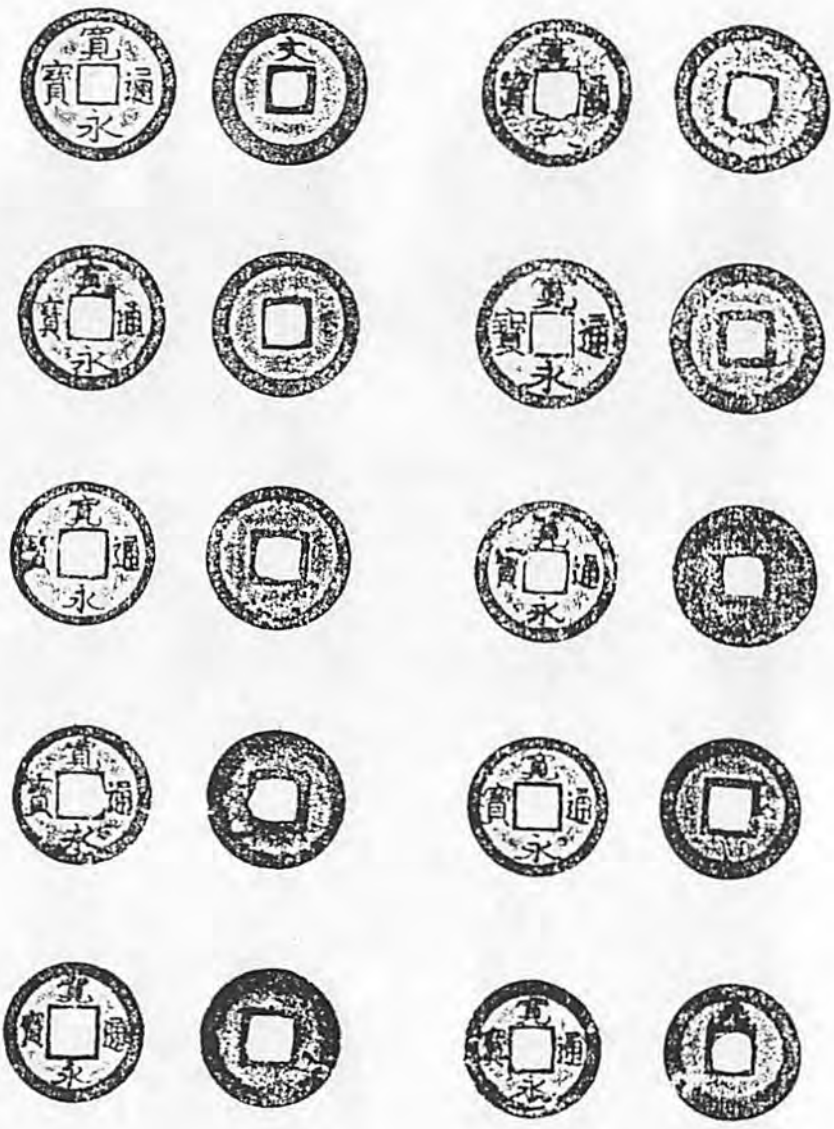


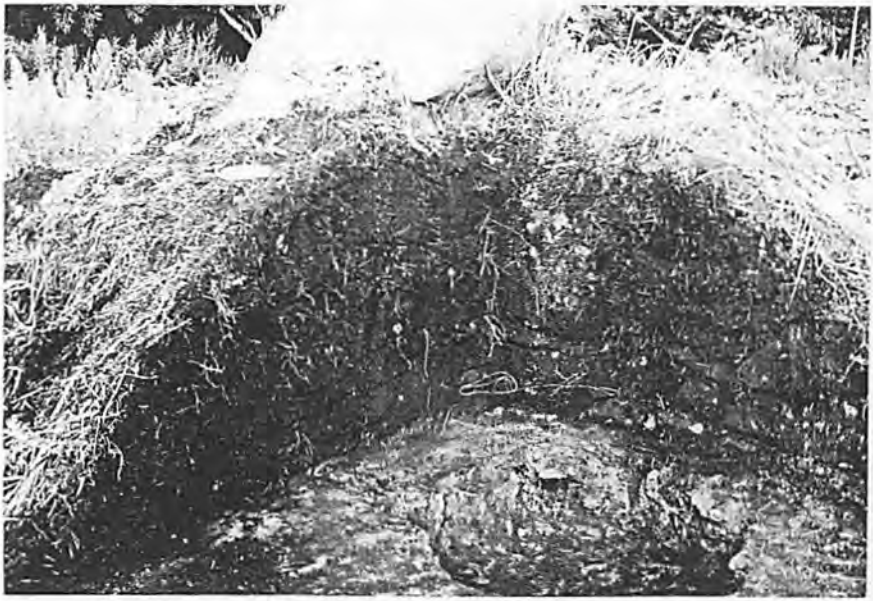
Fig 11　中野出土寛永通宝拓影図

PL 10　中野円墳状遺構

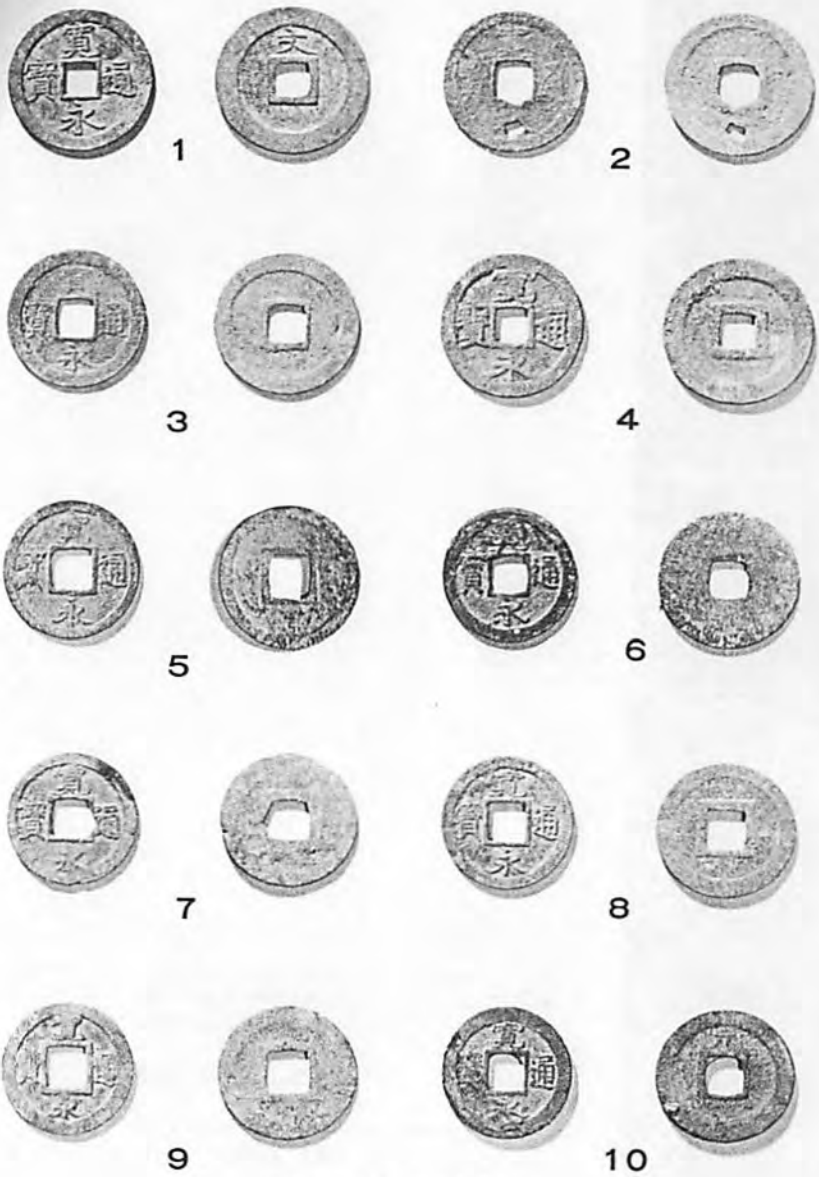
PL II〔1〕東ブロック　方形掘り込み　東より

PL II〔2〕東ブロック　方形掘り込み　南より

PL 12〔1〕北ブロック　北西より



PL 12〔2〕西ブロック　西より



PL 13　中野出土寛永通宝

大館市史編さん資料第6集
秋田県北秋田郡比内町
谷地中「舘」
中野円墳状遺構
(代)　奥山　潤

発刊　大館市三の丸　13－1
大館市史編さん委員会

印刷　大館市谷地町後60
(有)大館孔版社